和書門
類 二四七二九號
六六函
一〇架
二一二冊

内閣文庫
和書
類 二四七二九號
函 一六六
架 一〇 冊 二一二

内閣文庫
番號 和 24729
冊數 212 (79)
函號 100 216

Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak

colorchecker
x-rite
MSCCPP3C1214
MSCCPPPE1214

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

浅草文庫

ロキイ

是ハ九州柳ヶ浦ゟ出る僧

秋ハ都を忘れ侯

思ひ立こゝろのぼりけ

九月朔日

柳ヶ浦と立出くゝ

桑切アイ

ずゝきゝあひのつゆかゝ所の

ゆゝとをぶらく様乃道ゝを家ゝ

なき様の道こゝ窟ゟ見ハ

国立公文書館
National Archives of Japan

津の國山崎とかやゝ尚ひよ祥
まれたを珍ふハ石清水八幡宮て
御座ハ我國の宮作の宮とハ
一躰なれハまこゝろゝやと思ひ出
ある物と思よ梅花の花と感と
咲みだれてハ立ゝ寄ゝ
思ひ出ても男山ハ麓の松べよ

来てゝ見れぬ花の花ちゝよ
さて色をゝ心と露とゝ
ぶしの音まても有ほ也
野草花をおびて蜀錦をつゝ
桂林雨をそゝ松風を
武の男山の梅花ハ名歌も
まれたるなゝ思ひ出ハ

家づとにもてこで華一本をたを
らせと此節花乃過よ立られぬ
三月
なりうの花なれ折捨ぬるの
色ハ迄き雲乃ごと俗嘱で
節とくりなをきそたゞれ
よ偕老を契ん乃まと
やもし男山乃名を乃て忘れ
節花とゝ形ほうる花よりもしてて
なと情なく、手折捨あ広なる乃
桜ゝやなきそ山ハ男なるへ
ゝてまゝせバ是ハ道咲乱たる
節花をバ惜ぬ捨ぬ
ゝ理なき此罪色乃華寺
ゝて人 紙花 口キ

後生へ縁乃家乃子あれば佛乃
手向とぞ思ふ一本仏ゆゑ
仏へ宮に家乃子あ
きば仏よ手向と思ふべきれば彼
すがら乃孫ともで手向
もと思ふ古き手向もとつきば
たぶらをかづたてあぐ三世の
仏よ祀ぶ為ぶとたち
縁乃家乃法よ惜み
給べきれ日とそ稼よ古き手を
ひうば行とて僧侶遍昭ばりめ
でとをるだちぐ為花とは
よ見給れきるぐ
我ぞよきと人語ふと深く

きのぶのきち衣の衆と考る事
のまくらをおらべしと疑ひる
きれば其時たとへてきたまひぐ
ハ家乃ネ[illegible]ハ詞と[illegible]ハ
うきはバたりぐれるぐらゞ色ふ
とぐる花ゞどもくゞ[illegible]ぐる
きゞを色ゞて帰るうてゞとき

道ゞ[illegible]ゞ[illegible]
可乃古ゞをバきゞ[illegible]
ゞ[illegible]ゞとゞ[illegible]
男ゞ[illegible]ゞと思ハバ[illegible]
乃花ハゞ花ハゞ[illegible]
ゞ[illegible]ゞ乃名ゞ[illegible]
一本ゞ[illegible]ゞ[illegible]

なにはにめでたき花くらべ思ひ寄
節と分るる花乃名よ誰僧都を
なぎ乃葉ゝ葉ゝ分て那邪乃かつら机夢ハ
まことの花ゝ仏乃たのもしき
ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
おがめ入てゝまじぶ八幡宮よまいらんと
此所ゝ只今山とゝ者ゝて

作色八幡へ乃道ちくぐべこ
ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
の乃へ家乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
も閑おきこの水ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

業行道乃有様は、所々に
ありて乃時節のこゆきあるは格別と
い、神さ
男山乃ふもとに
紅葉も照うて日もうゝ乃
石清水乃衣も如何あらやうに
のたもとよりかげ
上ハ切ア久ぐる乃月乃うつの

を中ゝ乃神宮寺あるゝ
ゝ中ゝ乃地うれ岩松さだかく
ゝ乃色合めぐりとして諸木ゝを
ゝ乃雪乃罪ぶし乗て見
ゝ三年世界
星も光るゝ日乃夫のゝ玉
ゝ乃錦かけまくも。

ゝこゝにて、神ゐを見て
石清水八幡宮にまうでつゝ侍へ給く
御をがみをしたゝめやがて日の暮てゝんへば
はきあへず　はきあへず　あるゝ菖蒲と
ゝの八幡山につきたるいきれ
ゝてゝ　有ゝ何もあやしきふ
菖蒲花乃古歌をひゝてたゝむを

ゝゝもいたづらごとゝゝて菖蒲と
中ゝゝ男山につきたるいきれて
ゝゝゝ此山の麓に男塚女塚とて
ををゝゝべゝごあるゝにゝへられ
あるゝハ男づゝゝ此方あるハ女塚ゝ方
男塚女塚ゝゝて菖蒲乃謂
ゝゝゝ是ハ生田の人のまゝゝて

さて其婦のくにハ行くゝ学ハ
いかゝ人やらん　　都の人
男ハ此ハ播山より中ノ郡に頼ん　と
しんへ上京　やゝへを語る
もしとゞまるゝ中　さねぐとあき絵を
ゆゝしくまもるゝ　ひの便を思ひ
ゝ物ハ更行月　ゝれ

夢乃ごとくゝ
一本の男鹿乃角の
陰ゝ　元魂を留る法乃色
たゝ夢幽霊出る
芦根　剛　廣野
古墳おゝ又何
ゝ猛獣も棲ず

見て上へ
なびけば昔の秋の風
ツレ上
うら嵐の峰の松
見てへらば
ふもとの浦の海
見へ
花の色
有明の月
亡魂の
ツレ上
景
都より
使者

記憶をとゝのへて、此山寺の
中にまゐり、見て
見つゝ一本生出たる頼朝公の
思ひ出にて小松の
ありきるとて花色もちがひ
きく草の根も我れも露ぬれ
うべて立ちぬ此花うゝたる

色にそめてどれとわきまえぬ
のきに立のきばかりぬれぎぬ
よりて貴うしも思ひ
出の昔を思ひて
花の時をとゝのへと書し
水ぐきの弘の世にもあれやも
名下
ちり散る時よ
とゝ世界やる我なよとあき

水乃泡と消えてはかなき身の
あるもなきとへよ和が人間なりや
浮世よ信んよりハ形なる道よ
あるとて
つぐて此ほうそを
ぎて
よこめよわが塚
よ剛て又男塚とヤまりうの
塚ハ見ぬ和まぼろしあぐら

来りたるを紙に
なびて
剛 和嬢の怨霊ハ
うら
剛浮雲書
うをとをりて
真人言力の道も
ちまつぎのどよ書き
人とくらわ
やうてやきのが
きバつるぎハ
骨をだくこハうもハかよ

ろしやつるぶの枝のだいもんぢうの
罪のなりける果ぢやまかり来
花のごとくなる色夢ぢ昔花
寄り豊やの縁ふ深へてたび
珍へつるとうかべてたびぶへ

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan